

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

東北高体連登山専門部顧問研修会に参加して

岡山県 田中初四郎先生 寄稿

第38回目になる顧問研修会に青森県の樋口さんの誘いもあり、松田大さんと参加した。2月13日(金)から15日(日)、宮城県鳴子温泉・オニコウベで開催された。まず感じたのは参加者の多さ。青森3、秋田4、岩手3、山形7、福島3に開催県の宮城からは21名であった。内容も充実している。

1日目：専門委員長会議、「講話」が3件。2日目：登山行動。3日目：「各県の現況報告」「高等学校登山専門部の指導と問題点について」岡山から片道1100キロ強、大さんと同行する松本から片道590キロ。2日目の14日(土)朝現地に着き、「登山行動」と夜の食事会に参加した。宿泊場所のホテルオニコウベに着き、準備を始めると顔見知りの方が声をかけていただく。ゲレンデに集合し、参加者の多さに驚く。

リフトを3本乗り継ぎ、小柴山と大柴山の中間の標高点815に到着。ここからスキーアップする。元ゲレンデを登り、廃止されたリフトの降り場が見えると南にトラバースを始める。冬場営業していないテレキャビンの終点を目指し、南南西に伸びる尾根を上がる。先頭をリードする宮城県の太田さんは5週連続して下見をされただけあり、的確にコース取りする。時折、晴れ間がのぞくも風が強く雪が舞う。大さん曰く「あなたが来ると荒れる」。昨年の同時期にあった北信越山スキー研修。苗場は大雪のためにリフトが止まり、山に入ることさえできなかった。片道850キロ、雪を見に行っただけ？

テレキャビンの終点で昼食をとり、大柴山手前の展望台まで登る。テレキャビンの終点まで引き返し、下降準備。登ってきた尾根の林の中を標高点815を目指す。スキーを履いても膝上の新雪。慣れない人にはターンも一苦勞。技術と道具の差が出る状況であった。大さんと小生はこの新雪を楽しむことができ、この研修会に参加してよかったと思った。

夜の食事会、司会から突然の依頼を受ける。各県の出し物を評価し、講評と最優秀を発表せよと。趣向を凝らした出し物。聞くと例年あるとのこと。大さん曰く「北信越で同じことをすると参加する県がなくなる」。小生も同感である。東北地区のすごさを垣間見た思いがした。それにしても開催県の参加者の多さ。この会を成功させることにかける情熱を感じた。帰りのことがあり3日目の座学を聞くことなく帰ったが、参加させてもらってよかった。

悲劇を2度と繰り返さないために

今から26年前のことだ。1989年(平成元年)3月18日午後3時45分ころに、その事故は発生した。遠見尾根の地蔵の頭付近で県山岳総合センター主催の「高校生の冬の野外生活研修会」中のことだった。高校の先生方が4人表層雪崩に巻き込まれ、3人は救出されるも、松本蟻ヶ崎高校の酒井耕先生は生きて戻ってくることはなかった。この研修会は17日から2泊3日の予定で開催され、岡谷東、松本深志、松本蟻ヶ崎、

須坂、大町の5校から生徒24人と教師7人、講師5人の計36人が参加していた。長野県内の山岳部顧問の先生方でも、若い先生方はこの事故のことをご存じない方もいらっしゃるかもしれない。この事故については、私自身思うこともあるが、すでに判決も出ており、一定の時間の経過もあるので、概要のみの紹介にとどめたい。ただし、この事故を風化させてはならないという思いは強い。

亡くなった酒井耕先生の高校・大学時代を通しての、無二の友人であった西牧岳哉先生（現深志高校山岳部顧問）から、次のようなお誘いがあった。西牧先生より許可を得たので、県内とりわけ、中心地区の高校で参加を希望する学校は、一緒に酒井先生の御霊に思いを寄せながら、雪崩について学ぶ一日にさせていただければと思います。紹介したい。2度とこのような事故が起きないために、この事故を風化させないためにという意味で、ご都合のつくところは、生徒ともども参加していただければありがたい。

以下、紹介します。****

松本深志高校山岳部 雪崩・イグルー泊の学習会

日時 3月14日(土) 荒天の場合は15日(日)に順延

五龍遠見スキー場テレキャビン（ゴンドラ）乗り場（建物前）で待ちあわせ

10:00 テレキャビンに乗車 → 10:10 下車→10:30 アルプス第一リフト乗車 → 10:40 リフト下車 →10:50 雪崩発生現場 近くに到着 → 11:00 慰霊、状況説明、赤羽先生の体験談→11:40 米山さんからイグルーについて説明 12:30 昼食と平行して各自イグルー作成（平行して雪の断面観察）14:00 ビーコン、ゾンデ棒の使い方 体験 15:15 終了、下山 歩いてテレキャビン乗り場まで行き、テレキャビン乗車

というような内容の学習会を計画されているということです。当の研修会で、雪崩に埋まり九死に一生を得た赤羽康定先生、労山の中山建生さんが当時の様子などを説明、またNHKカメラマンでイグルー作りにかけては非常に経験豊富な米山悟さんが同行し、実際にイグルーを作る体験をするという内容になっている。大町高校では、すでに年間計画でその前週にあたる7日に梅池で山スキー合宿を組んでいたこともあり、2週続けてどれくらいの生徒が出てくれるかわからないが、声をかけているところである。

もし、春休み前の計画がまだという学校があれば、一緒に学習しましょう。問い合わせは西牧先生もしくは大西までどうぞ。

編集子のひとごと

28日土曜日、東京神田で、第5回日本山岳遺産サミットが開かれた。大町高校山岳部の鍬ノ峰登山道整備事業が認定表彰されるということで、生徒2人と共に招かれて出席してきた。会場には事業の言い出しっぺで当時の顧問松田大さん、2002年の部長三戸呂拓也君も駆けつけてくれ、現役生徒を激励してくれた。基金の会長で山と溪谷社の副社長川崎深雪さんより、認定証と副賞（鍬ノ峰の1/5万模型）をいただき、同時に多くの方々より祝福していただいた。来年度以降もこの登山道を大町高校の心の山として、整備を続けて行きたいとの思いを胸に帰ってきた。生徒にとっても大きな励ましをいただいた。（大西 記）

